

別府温泉郷における

地域資源活用の軌跡と課題

別府大学 中山 昭 則

はじめに

今日、国内観光の不振が叫ばれ既に二〇年近い年月が経ている。一九九〇年代初頭のバブル経済全盛期には、国の後押しを受けて全国各地がリゾートブームに沸いたが、その顛末は言うに及ばない。一方、東京ディズニーランドの大成功に刺激され、各地で開業していったテーマパークであるが、結局は東京ディズニーランド（現東京ディズニーリゾート）の一人勝ちの状態が続いている。

こうした中で、温泉地は地域差はみられるものの、観光資源として全国的には根強い人気を保っている。団体客に依存してきた大規模観光温泉地は苦戦する一方、個人旅行向けにスイッチした保養型温泉地は好調である。

さらに、温泉地は新たな局面を迎えつつあるのかもしれない。

い。つまり各地で客室数二〇室程度までの規模の和風旅館が好調なのである。これは立て替え時期を迎えた旅館の多くが、規模を絞った和風旅館としてリニューアルしたものと聞く。今や露天風呂付客室は珍しくはないし、部屋食も人気が高い。諸般の事情で部屋食を提供できない宿も、プライベート空間の創出に工夫を凝らしている。

さて、温泉資源が観光資源の中で優位性を保ち続けている要因については、これまで余り議論されてきた形跡はない。これまでの研究は、抱える現状分析と変容する地域分析が研究主題として扱われてきた傾向にある。

我が国を代表する温泉地である別府温泉郷は、国内の温泉地の中でいち早く温泉観光都市として発展する一方、全国的には衰退の一途にある湯治場機能を今日なお有している。いわば、我が国の温泉資源活用の歴史を辿るテキストといえよう。

そこで本稿では、別府温泉郷が温泉観光都市として成立していった軌跡を検証する。ここでは、その骨格が出来上がる昭和一〇年代までを検証する。さらに、近年その来歴を新たな資源として活用する動きが活発化している現状も検討する。

一 地域資源活用の歴史的経緯

一―一 温泉資源の観光資源化の経緯

別府温泉郷における地域資源の本格的な活用は、明治四年（一八七二）、当時の県令松方正義によって、別府（楠）港が整備されたことから始まる。これを契機に別府の温泉を資源として注目したのは外部の人々であった。一八七三（明治六）年には、大阪開商（ヒラキ）社によって蒸気船「益丸」一八トンが、大阪・多度津・鞆の津・三津浜・別府の航路が月一往復のスケジュールで就航している。鉄道がこの地にやってくる三七年も前のことである。さらに、その二年後には満珠丸と金刀比羅丸も就航し、京阪神と別府を結ぶ瀬戸内航路は早くも競争時代を迎えたのであった。

瀬戸内海は古くから多島海の風光明媚な景観と、歴史的舞台を誇る観光名所であった。これらを巡りながら終着点に温泉地が控えるという抜群の環境といえる。別府温泉の入浴者数は、外来とのアクセスが確保されたことも一因となり増加していった（表1）。

表1をみると、別府、浜脇両温泉では僅か二年で入浴者数は一〇倍前後増加し、観光地化が劇的に展開していたといえ

表1 別府温泉郷主要共同浴場浴客数推移（明治12-14年） (人)

	明治12年	明治14年	対明治12年比
鉄輪・熱ノ湯	1,985	7,500	3.78
鉄輪・熱ノ湯	1,984	7,500	3.78
鉄輪・蒸風呂	1,920	2,000	1.04
亀川・四ノ湯	800	600	1.00
別府・楠湯	4,200	24,900	5.93
別府・不老湯	800	20,800	26.00
別府・永石湯	1,100	22,400	20.66
浜脇・西ノ湯	3,000	25,000	8.33
浜脇・東ノ湯	4,200	25,000	5.95
野田・芝石湯	400	400	1.00
南立石・観海寺湯	1,100	35,000	3.18
南立石・堀田湯	1,900	35,000	1.84
	23,291	143,100	6.14

(注)『別府市誌』昭和60年度版、478頁より作成

よう。明治一二年は別府温泉の共同浴場竹瓦温泉が県費によつて新築され、この界隈が温泉観光地としていよいよスタートを切つた年でもあつた。これに対して、鉄輪温泉は三・五倍の増加で緩やかなものであつた。さらに「蒸し湯」に関して言えば横ばいの状況であつた。

こうして温泉観光地としてスタートした別府温泉郷であるが、温泉資源開発という点において革命的な変化を及ぼしたのは「湯突き」と呼ばれる井戸掘り技術（上総掘り）を導入したことによる。この技術は一八八二（明治一五）年豪商荒金猪六が用いたとの記録が最も古い。新技術の効果は抜群で、一九〇五（明治三八）年当時は別府温泉郷全域の源泉は一九八孔であつたが、その僅か六年後の一九一一（明治四四）年には五九三孔、さらに一九三三（大正一二）年には一五八四孔に急増している。源泉の急増は、当然のことであるが源泉保護という問題に直面する。大分県は源泉掘削が全盛期であつた一九二二（大正元）年に、鉱泉取締規制を設けている。乱開発と源泉保護という問題は一〇〇年前既に現実化していたのである。

このように、別府温泉郷は明治時代には、都市部とのアクセス確立、新技術による温泉資源の確保によつて温泉観光地

として確立したのである。当時の温泉地の観光地化の全国的動向をみると別府温泉郷の特徴が浮き彫りとなる。栃木県鬼怒川温泉、静岡県熱海・伊東温泉、和歌山県白浜温泉といった、今日大都市周辺部に立地する大規模な温泉観光地の多くは、明治時代は交通アクセスの確保が最大の課題であつた。また、これら温泉地の発展を支えた大手私鉄に代表される資本の導入はまだ先のことであつた。歴史の古い愛媛県道後温泉、兵庫県有馬温泉もまだ規模の大きな湯治温泉との位置付けに近かつた。例外的に神奈川県箱根温泉と長崎県雲仙温泉は在留外国人の保養地として開発の手が及んでいた。こうした動きの中で見ると、別府温泉は我が国で最初に『温泉観光都市』という新たなジャンルを確立したといえよう。

さらに、温泉観光都市として確固たる地位を築いたのは、地獄の観光資源化が本格的となつた大正から昭和初期のことである。

別府各地に点在していた地獄は、明治初期までは「厄介者」扱いされ『熨斗に一升瓶を付けるから持つて行つてくれ』とまで言われていた。つまり、雨が続けば地獄から熱泉が溢れだし田畑を荒らした。時としては原因不明の事故現場となつてしまつたとの記録さえある。この結果、例えば海地獄は明

治時代初期までは幾度となく転売されてきたとの記録も残る。

このような位置付けであった地獄であるが、一九一〇年(明治四三)年、海地獄を覗き見していた湯治客に対して、管理人が見学料と称して五銭を徴収したところ、何と喜んで払って見学したと伝えられている。当時の記録によれば「一日三円も水揚げがあるとホクホクだった」と伝えられているので、一日およそ五〇〜六〇名程度の見学者があったと推測される。これが口コミで広がり「見学者」の数も増えていったのであろう。「地獄見物の人気」という思わぬ動きに、所有者たちは観光客の目を引き付けるために様々な対策を練った(表2)。こうして地獄は新たな観光資源として成立していったのである。

各地獄の取り組みをみると、海地獄は「自然美豊かな大遊園地」をキャッチフレーズに掲げ、自然庭園と遊歩道を売り物にしていた。血の池地獄は庭園風園地を造成し、草葺家屋や生垣を配置していた。また、鬼山地獄は当時世界初となる温泉を利用したワニ養殖に成功し、大ワニ一〇匹、子ワニ一二匹を公開した。ワニ園は現在でも健在である。さらに、竈地獄は「一丁目閻魔の茶の湯」「二丁目七変化坊主」「三丁

目釜地獄」「四丁目極楽」と銘打った遊歩道を作り、八幡地獄は別途入場料を徴収するものの「怪物館」を開設し、遊園地化していった。

本来地獄は噴泉と特異な景観が織りなす自然資源である。アメリカのイエローストーンはその代表である。我が国で

表2 地獄の施設

地獄名	面積	関連施設	お土産品	売店面積
海	3,000坪	自然庭園と遊歩道	地獄絞り、竹細工、湯の花	40坪
血の池	1,000	庭園風園地	地の池膏、血の池染め、竹細工	簡易施設
龍巻	100	間欠泉(30分毎に1分間噴出)	記載なし	30
坊主	不明	地獄の泥を陸軍病院へ	坊主饅頭、地獄染め、湯の花	60
鉄輪	120	貸し間業	湯の素、西瓜糖、湯の花	不明
白池	500	隣地に入浴施設と旅館	白池膏、白池胃腸薬	10
鬼山	300	温泉利用のワニ養殖	ワニ皮細工、擬皮製品	10
竈	不明	地獄に因んだ遊歩道	湯の花、胃腸薬、竹細工	30
鬼石坊主	500	不明	坊主膏、湯の花、竹細工	30
鶴見無間	500	湯の花採取と製造施設の公開	地獄焼人形、別府絞り、湯の花	30
八幡	500	怪物館(別途料金)	八幡地獄膏、寿命膏、鎮痛液	30

注) 田中・後藤(1942) および『別府市誌』(1933)より筆者作成

も、雲仙温泉や箱根温泉などは自然資源として整備している。これに対して別府温泉郷は遊園地化させていたことが明確にわかる。加えて、元来自然噴出が基本である地獄を、人工的に造りあげていたのである。表2の地獄の中にも人工掘削して地獄を造り、その後枯渇して姿を消した処も少なからずある。さらに、泉源として今日まで残っているところはあっても、消滅してしまった地獄も多い(表3)。

表3 消滅した地獄

名称	所在地
八幡地獄	南立石八幡町
八幡間歇地獄	南立石八幡町
無間地獄	南立石八幡町
雷園地獄	御幸
鉄輪地獄	御幸
十万地獄	御幸
雷地獄	風呂本
紺屋地獄	明礬
朝日間歇地獄	火売
今井地獄	竹の内
三日月地獄	観海寺
堀田地獄	堀田
照湯地獄	小倉
乙原地獄	乙原

注)『別府市誌』、中山(2005)より作成

1-2 観光地としての広がり

前項では、温泉資源が観光資源として確立していった軌跡を検証したが、その裏には当然のことながらその仕掛人がいた。こうした先人たちの巧みな「地域眼力」が別府温泉郷に新たな「見せ場」を作り、温泉観光都市が形成されたのである。ここでは、先人たちの動きを絡めて、温泉資源がどのように観光資源として活かされたのか検証してみたい。

別府温泉に関しては、明治の中頃から多くの文人墨客が訪れ文筆によって紹介されている。このことが全国的に名を広めていったことは間違いない。しかし、観光地としての整備は、別府の豊富な温泉と風光明媚な景観に着目して、実質的な活躍を果たした先人たちの力によるものである。

まず取り上げるのは千寿吉彦である。千寿は竹田藩の武家の出身であるが、後に鉄道技師となり、明治末に日豊本線の敷設工事のために来別した。別府湾の見事な景色と豊富な温泉を目の当たりにして、彼は温泉付き別荘地を提案したといわれている。その泉源として海地獄を買い取り、特産の竹を利用して温泉を引いたという。一九一四(大正三)年に別荘地として開発したのが現在の新別府である。一区画を三〇〇坪として京阪神を中心とした上流層に売り込んでいったとい

う。

また、同様の温泉付き別荘地は、多田次平によって荘園地域の開発が計画された。しかし、事業は頓挫し、久留米出身の国武金治郎の手に引き継がれ、六角温泉を中心とした地区と現在の南荘園地区が開発された。

このような温泉付き別荘地は箱根などでも開発されているが、大都市圏からの距離などを勘案すると別府の動きは特筆すべきであろう。これは京阪神の財界人とともに中国大陸や朝鮮半島、台湾に進出し財を成した新興の資本家たちも購入者層として想定していたことが背景にある。

また、別荘地として整備された三〇〇坪の区画は、地主の多くが去った戦後は旅館や企業等の保養所として活用され、その後の別府市街地形成に影響を及ぼした。しかし、こうした施設とりわけ企業等の保養所はバブル経済崩壊後相次いで処分され、今日では区画も分割され、宅地として転用されるケースも多い。また、六角温泉界限は共同浴場を中心とした放射状の街路が残されている。しかし、どのような経緯でこのようなヨーロッパ風の放射状の街路になったのか、都市計画史的視点からの検討が必要であろう。

明治から大正期にかけて、温泉観光都市として形成されつ

つも、温泉付き別荘地としても開発が進んでいったが、別府を文字通り全国区の温泉観光地に押し上げたのは油屋熊八翁に依る処が大きい。彼の功績としては全国初のバスガイド付きの遊覧バス事業と、『山は富士、海は瀬戸内、湯は別府』というキャッチフレーズを大々的に掲げた宣伝活動があげられる。

遊覧バスの発想は、恐らく皇太子（後の昭和天皇）の別府巡幸のために整備された周遊道路の有効活用から出たものと考えられる。当時地獄地帯へのアクセスは悪く、悪路を人力車か馬車、あるいは当時入り始めたハイヤーで耐えるしかなかったといわれている。

熊八は一九二八（昭和三）年、亀の井バスの運行を開始した。当時最新鋭の二五人乗りバス四台を配置し、午前七時三〇分から二五分毎に運行した。バスには女性ガイドが乗り込み、七五調の案内は話題となったようである。料金は一周一円で乗り降り自由とした。こうしたシステムも全国的には珍しかったに違いない。この料金であるが、別府・海地獄タクシー・馬車往復料金二円五〇銭のおよそ三分の一という廉価な上、乗り降り自由ということで、連日各便ともに満席の状態であったという。当然、人力車車夫やハイヤー会社との

軌轆を生み、時としてバス停の破壊や座り込みを強行するなどの実力行使に訴えられたこともあった。

遊覧バス事業には、一九三二（昭和七）年大橋自動車商會が参入し、さらに一九三四（昭和九）年泉都自動車も参入し激烈な競争を呈したという。

さて、バスというまったく新しい手段による観光客の大量輸送は何をもたらしたのであろうか。まずは、地獄めぐりの玄関口となった鉄輪温泉であるが、バスの運行とともに二五〇分おきに、三社が競合した全盛期には七〇名もの観光客が押し寄せたと考えられる。各社とも一日一八本程度運行していたので、一日当たり五〇便以上のバスが到着し、およそ三五〇〇人も観光客が毎日地獄見学にやってきたことになる。当時はまだ湯治場であった温泉地が受けた衝撃の大きさは容易に想像できよう。事実鉄輪温泉において、昭和初期に開業した旅館が多いことも判明している（宮崎二〇〇九）。遊覧バスは一九四一（昭和一六）年になると、戦時下の統合令により亀の井バスに統合された。一時は戦時下につき遊覧バス事業自体が廃止されるとの懸念も広がったようであるが、路線バスとしての役割を訴え、それが認められて存続された。

一九二五（大正一四）年には、鉄道工事で財を成した広島県出身の松本勝太郎によって別府鶴見園開発された。ここでは「西の宝塚」をめざし歌劇団が結成された。また、施設面では収容人員六〇〇人の大劇場を売り物とし、その規模は宝塚・松竹と並び称せられた。入園料は大人四十銭・小人半額、これで観劇は無料であった。さらに大浴場、蒸湯、滝湯、砂湯、家族湯、温泉プール、大食堂、宴会場などの施設も有した。

一九二八（昭和三）年には、東京の鉱山会社「木村商事」によって「ケープブルラクテンチ」が開業した。この地は当初金・銀鉱山の開発地であったが、泉源の枯渇を恐れる地元の要望を受け遊園地としたものである。当時の入園料は大人五十銭、小人半額で、展望温泉、食堂売店、乙原地獄、ベビーゴルフ場、演舞場があった。しかし、最大の呼び物はケープブルカーに乗車して遊園地に向かうという画期的な演出であろう。

こうして、大正から昭和初期にかけて次々と新しい仕掛けが造られていった。これらはいずれも温泉資源を最大限活用したものといえる。当時温泉観光都市といえども地方都市であった別府に、このような大掛かりな観光施設が次々と誕生したのは、こうした先人たちの功績であることは間違いない。しかし、これだけの開発規模は個人の業績だけで捉えられる

ものではない。当時の観光政策との関わり中で検討する必要がある。それについては次項で触れたい。

一―三 別府観光の大発展と観光政策

我が国において「観光」が本格的な施策として掲げられたのは、一九二二（明治四五）年のジャパン・ツーリストビューロー（JTB）の設立からである。この組織は当時欧米で流行っていた「世界一周観光団」の対応を最大の業務として、横浜と長崎に案内所を開設した。ここではホテルの案内を波止場に掲示するとともに来航船内に空室情報の掲示を行った。

当時の外来客への対応は遅れており、特にホテル不足と案内情報の未整備が課題となっていた。例えば、外国人来客は波止場で右往左往しているといった内容の新聞記事もみられる。また、宿泊施設の未整備と対応も大きな問題となっていたようで、例えば、「ホテル」と冠して実は和式旅館で外国人が閉口するといった話は各地で残されている。これに対して、一九〇九（明治四二）年、内務省は日本式旅館のホテル名使用禁止令を出しているほどである。他方、JTBはサンフランシスコ博覧会での宣伝活動も行うなど観光誘致にも努

めていた。

こうした海外での観光誘致は、我が国が日露戦争と第一次世界大戦の戦勝国となり、所謂「列強」に加わったこと。外貨獲得の戦略として観光の優位性に目を付けたこと。また、大型客船就航による海外旅行市場の成立。こうしたことが背景にある。

明治末頃の東京市内（当時）には、外国人の宿泊が可能なホテルは帝国ホテル、精養軒ホテルなど僅か五軒にすぎなかった。一九〇九（明治四二）年には、アメリカから六五〇名の大観光団が来日することになり、東京市内のホテル不足が懸念された。増加が見込まれる外国人観光団の対策として、一九一四（大正三）年に開業した東京駅にステーションホテルの建設計画が持ち上がった。ホテルの規模は客室八八五室を誇り、総工費は一二〇〇万円が見込まれていた。しかしこの計画は一九二〇年の戦後恐慌で頓挫してしまっ

た。

外国人の来航は別府温泉も例外ではなかった。外国船の別府港への入港は一九〇九（明治四二）年オーストリア軍艦カイゼリン号に始まる。大型客船の入港は一九二六（昭和元）年のカナダ観光船エンプレス・オブ・スコットランド号

(三、五〇〇t)から本格的になる。同年にはイギリスのフ
ランニア号も入港し、同船は翌々年にも来航を遂げている。
一九二八(昭和三)年にはエンプレス・オブ・オーストラリ
ア号が寄港し、同船はこれ以後、昭和五年、六年にも寄港し
ている。

このような大型外国船の別府寄港は国策として推進された
ものであった。政府は、横浜港(東京・日光・鎌倉・箱根等
見学)↓神戸港(京都・奈良見学)↓瀬戸内海經由↓別府港
のコースを設定し、別府から観光客は陸路阿蘇・雲仙・長崎
を巡り再び船で上海に向かうという国際観光ルートの整備を
計画したのである。

熊八翁の活躍もこの時期と重なる。こうした視点で見た場
合、熊八翁のアイデアについて多角的な視点から検討する必
要性が生じてくる。

さらに、一九三一(昭和六)年四月には「国立公園法」が
成立し、新たな観光資源として有望視され全国各地で誘致の
動きが活発化した。その他にも、国民投票によって「新日本
八景」を選定するという新聞社主催の事業も行われ、別府温
泉は温泉部門で選ばれている。このように、大正から昭和初
期は観光を施策として捉えられた時期であるとともに、観光

が地域の活性化に繋がるという意識が国民に芽生えた時期で
もある。

国立公園の誘致は、全国各地で地元選出の代議士ならびに
影響力を持つ貴族院議員達を動かして大掛かりに行われたよ
うであった。帝国議会には国立公園候補地として全国各地の
名所が建議・請願という形で提出されている。別府温泉郷は
一九三一(昭和六)年の議会で二件上程されている。一件は
別府単独での上程であるが、もう一件は阿蘇・雲仙とのセツ
トで上程されている。この上程に関わる地元の動きに関する
検証は、別府の観光発達史を検討する上で不可欠である。

国立公園は一九三四(昭和九)年に瀬戸内海・雲仙・霧島の
三か所が第一陣として選定され、戦前では全国一二か所の国
立公園が誕生した。

一方、この時期別府温泉郷で大きな催し物が開催されてい
る。その一つは、「中外産業博覧会」で、一九二八(昭和三)
年の四月一日〜五月二〇日の四〇日間開催された。次いで、
一九三七(昭和一二)年三月二五日から五〇日間にわたって
「別府国際温泉観光大博覧会」が開催された。この博覧会は
別府温泉郷と阿蘇・雲仙・長崎を結ぶ国際観光ルートとして
構想されたことによるものであった。

このように、別府温泉郷は大正から昭和初期にかけて観光開発が一気に進み、華やかな時期であったといえよう。高度経済成長期にも賑わいを見せたが、この時はこれまで述べてきた観光施設が大活躍している。このことから別府温泉郷において観光開発の土台はこの時期に築かれ、地域資源もこの時期に形成されたものが最も多いといえよう。

二 歴史的な地域資源の活用と課題

二一 「地域の歴史」を観光資源化する動き

我が国において地域の歴史的環境を保全するという動きは、各地で開発が進んだ一九七〇年代前半に始まった。その一つの到達点として一九七五（昭和五〇）年に創設された『重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）』制度が挙げられる。加えて、同時期には国内旅行ブームを背景とした「小京都ブーム」も起き、岐阜県高山市、山口県萩市、金沢市などに観光客が押し寄せた。しかし、こうしたブームはマスコミから端を発した所謂「アンノン族」と呼ばれた旅行客層によるものであった。当時の別府温泉郷はまだ団体旅行を対象とした歓楽色の強い温泉地として発展していた。

現在のレトロブームに繋がる地域資源の見直しは、バブル経済崩壊後からの動きである。バブル経済の崩壊は国内の観光地および観光業界に大打撃を与えるとともに、観光地に対する投資も一気に冷え切った。

その結果、観光地として生き残るためには「自前」で観光資源を創出しなければならなくなったのである。レトロブームはこうした流れの中で起きたものといえる。このレトロブームと重伝建地区との決定的な違いは『本物度』である。重伝建地区は予備調査も含めて文化庁の厳しい選定基準があり、歴史的真正性（価値）のある建造物が集積して初めて選定される。一方、レトロブームの多くはその「時代設定」という演出が前面に出されている。つまり、国民の多くが実体験したことを思い出させ、「懐かしさ」を演出するものといえよう。

全国の温泉地はこのブームの渦中に組み込まれていった。例えば、愛媛県の道後温泉にある道後温泉会館（共同浴場）は、独特の建築様式がレトロなものとして解釈されて更に人気を高めている。兵庫県城崎温泉や山形県銀山温泉は独特の旅館建築が残り、これが温泉旅館街の原風景と解され人気を呼んだ。

さて別府温泉郷に目を向けると、戦災を受けなかったこと

が幸いし中央公民館をはじめとして、築数十年を経た建造物
がかなり分布する。加えて、前項で述べた通り飛躍的に発展
した昭和初期に建造された当時最先端の建築様式もまだ残っ
ている。さらに政財界人の別荘の一部も旅館として営業を続
けている。

別府温泉郷には銀山温泉のような木造三階建ての旅館建造
物が集積している場所はない。しかし、別府温泉郷の展開を
通史的に物語化すれば、別府温泉郷にも木造三階建ての建築
物があったと語れる。確かに浜脇温泉にその形跡は残されて
いる。

このように、別府温泉郷の発展を体系化して語ることに
よって、全国の温泉地が辿ってきた体験をこの地だけでほぼ
語り尽くせるのである。別府温泉郷の強みはそこにあり、ま
さしく我が国の温泉文化が凝縮されているといえよう。

今別府温泉郷各地でこのことが再認識されつつあり、市民
と行政の手によって様々な取り組みがなされている。次節で
はその動きについてみていきたい。

二二 地域の歴史性を活かした取り組み

(一) ボランティアガイドと「八湯トラスト」

別府温泉郷は「別府八湯」と称して、古い由来を持つ市内
八か所の温泉地をアピールしている。これは今日ではすつか
り定着した感があるが、八湯の提唱はそれほど古いことでは
ない。

ことの始まりは、一九九六（平成八）年八月八日八時八分
八秒に観光産業研究会が中心となり「別府八湯勝手に独立宣
言」を行ったことにある。ここで、市内八か所の個性的な温
泉地の特徴や個性を活かして活性化を図ろうとする動きが本
格化した。これに端を発して竹瓦倶楽部・鉄輪愛耐会などの
住民組織が各地で結成されていった。

中でも一九九八年に組織された竹瓦倶楽部はボランティア
ガイドによる街歩きツアーを始めた。当初は自分たちの住む
街を知ることから始まったのであるが、実践を重ねていくう
ちに知識と経験も積み、一九九九年には開催日を毎月第一・四
日曜とし定例化した。こうした動きは町内を活性化させ、や
がて別府八湯ウォークとして市内各地のボランティアガイド
ツアーへと発展していくことになる。

ボランティアガイドツアーは、その後「鉄輪湯けむり散歩」

「山の手レトロ散歩」「浜脇温泉・セピア色散歩」「竹瓦ゆうぐれ路地裏散歩」といったツアーが生まれ、今日では市内で一三コースが組まれている(表4)。

ボランティアガイドツアーが盛んに催行されるようになると、ガイドの育成と人材確保を求める声も高まった。これを受けて別府市は、二〇〇一(平成一三)年にガイドの資質向上と人材育成を目的として「観光ガイド養成講座」を始めた。この養成講座をきっかけに自らガイドを買って出る市民も現れ、受講者の有志によって「語り部の会」が作られた。会員たちは手始めに「竹瓦かいわい路地裏散歩」を竹瓦倶楽部から受け継ぐ形でツアーを実施することになった。その後会員たちは市内各地のツアーに参加している。

「語り部の会」の会員は四〇歳代から七〇歳代が中心となって活動している。また、市内の大学に通う留学生も参加していたことがある。会員たちは受け持ちのツアーの前には、自らの手で最新情報や歴史的な背景を確認している。その確認作業によって新しい発見ができることに喜びを感じているという会員も多い。また、自ら発掘した場所を案内し、参加者に喜んでもらう時にやりがいを感じている。会員たちはガイドへの参加によって交友関係が広がるとともに、地元に着

表4 別府八湯ウォーク一覧(2009年)

コース名	実施日	時間(時間)	費用(円)
竹瓦かいわい路地裏散歩	月・水・金・日	2.5	700
竹瓦かいわい路地裏散歩竹瓦倶楽部版	毎月第2・4日	3	700
竹瓦ゆうぐれ散歩	毎日	1	500
竹瓦夜の路地裏散歩	毎月第2・4金	1.5	1,000
浜脇温泉・セピア色散歩	日	2.5	700
山の手レトロ散歩	日	2.5	1,500
鉄輪湯けむり散歩	第3日	2.5	700
鉄輪温泉ゆうぐれ散歩	土・日	1	500
人情の町亀川湯遊散歩	第1日	2	900
堀田湯の里・湯けむり散歩	第2日	2	700
ふれあいウォーク	第2土	2	700
朝見郷・ロマン散歩	第3日	2	700
メモリアル号で行く別府湾海の散歩	要予約	1	2,000

注)『別府八湯温泉本』2009～2010年版より作成

と誇りを持つことができたと同様に感じている。

ボランティアガイドの特徴は、ガイドが自己研鑽によって隠れた地域資源を発掘することで一つの達成感が得られることにある。彼らは更にその自分だけの情報を観光客に紹介することで生きがいを得ることが出来る。一方、観光客はガイドブックなどには掲載されていない、いわば知られていない観光スポットに対して高い期待感を持っている。こうした両者のニーズが合致した時にこのボランティアガイドの意義が最高の形で示されることになる。

一方、別府温泉郷には、平成一四年秋に設立された「八湯トラスト」という組織がある。これは主として別府八湯の自然環境の保護および歴史的な温泉文化を有する建造物などの保存および利活用に関する活動を行うものである。

八湯トラスト事業や活動は以下の通りである。

一) 歴史的な建造物などを復元、修復、保存する為の基金事業。

二) 町歩きや情報発信などを通じて歴史的な建造物保存の意識を高める為の啓蒙活動。

三) 歴史的な建造物などの維持管理や活用を行う事業。

四) 町並みや景観を美しく保つ為の各種活動。

五) 環境を保全し、美しく保つ為の各種活動

別府八湯トラスト活動の趣旨は、行政の対処が困難な事項を対象に、住民が自ら参加し行政と協働の下で積極的な対象物件の保存および利活用を実行することである。この組織は平成一六年九月には「NPO法人別府八湯トラスト」となり、本格的な会員募集、基金の充実化働きかけが始まった。また、啓蒙的活動として、別府周辺地域の自然環境の保全を目的としたエコツーリズムの活動「別府湾地球学校」が大分県のNPOパートナー事業として採択されている。

別府温泉郷には、前述したが戦災を免れたおかげで古い建造物は比較的多く残っている。これら建造物に対して、登録文化財制度を活用して保護する動きがある一方で、旧中山別荘など取り壊されている建築物もある。別府の歴史性を物語る建造物の保護はまさしく急務の課題なのである。

(二) 鉄輪における地域資源を活かした温泉資源の活用
鉄輪温泉は「むし湯」を中心として成立し、筋湯、熱の湯等の共同浴場は湯治場の中心として機能してきた。これら共同浴場は立て替えを繰り返す、むし湯についてはその場所も幾度か移動しているとも伝えられている。一方では、鉄輪温

泉は湯治客を泊める貸間旅館が集積する温泉地として、今や全国的にも極めて稀な存在である。この鉄輪温泉の原点ともいえる湯治場の雰囲気将来にわたって残していこうとする機運が高まるのは必然的なことであった。

そこで、別府市は今や貴重となった湯治場の雰囲気を活かした町の環境整備に着手した。この事業は「むし湯」のリニューアルを柱としたもので、国土交通省「まちづくり交付金事業」（以下、まち交事業）を活用している。このまち交事業は、地域の特性を活かした地域主導のまちづくりと地域の活性化を図ることを目的として創設されたものである。その事業適用範囲は広く、自治体が設定した都市再整備計画に基づいて、道路・公園・下水道・河川の整備から地域交流施設整備、優良住宅整備、土地区画整理そして鉄輪温泉にみる市街地再整備にまで及ぶ。

鉄輪温泉におけるまち交事業は、別府市が実施を計画していた「鉄輪地区都市再整備事業」に基づいて行われている。この都市再整備計画は「ふれあいと情緒ある温泉街の賑わいを再生し、うるおいに満ちた湯けむりたなびく交流型観光地の創造」を目的として平成一七年度から五年計画で、総事業費はおよそ九億六、〇〇〇万円である（表5）。

表5 鉄輪地区都市再整備事業の概要

事業名	事業期間
鉄輪むし湯温泉整備事業	H17
観光交流センター整備事業	H17
街灯整備事業	H17～21
市道美装化整備事業	H17～21
情報板整備事業	H17～21
PR戦略事業	H17～21
温泉管共同BOX	H17～21
湯けむり景観まちづくり計画策定	H18
温泉遺産の復活事業	H18
モニュメント整備事業	H18～19
鉄輪温泉ポケットパーク整備事業	H18～19
大谷公園整備事業	H18～19

注) 別府市資料により筆者作成

事業は「基幹事業」と「提案事業」に区分され、前者は道路、公園、生活基盤整備などの地域の社会資本整備事業を指す。後者はまちづくり、観光交流などの地域の特性に見合った事業ならびにその事業調査・研究、推進事業などに関する事業である。鉄輪温泉における事業区分をみると、提案事業としてメインといえるむし湯リニューアル事業が盛り込まれている（表5）。

表6 鉄輪地区都市再整備事業の区分

事業区分	事業費	事業内容
基幹事業	7億6,000万円	市道美装化整備事業 2,330 m (道路石畳整備)、公園1カ所、ポケットパーク3カ所、観光交流センター、街路灯83カ所、情報版24カ所、モニュメント1カ所、駐車場20台分
提案事業	2億600万円	むし湯温泉、温泉管共同BOX1,500m、景観計画策定、温泉遺産の復活2カ所、宣伝PR

注) 別府市および国土交通省資料により筆者作成

むし湯リニューアル事業費は一億九七二〇万円で、新築なったむし湯は木造一部鉄筋コンクリート造りで、旧蒸し湯と比べると外観は大きく変貌している。述べ床面積は二・三倍、蒸し風呂部分(石室)は男女別各一〇㎡で、これは旧蒸し湯の男女共用九㎡の二倍の広さとなっている。さらに、休憩施設も整備され旧蒸し湯とは外見とともに機能面においても大きく変貌を遂げている(表6)。

管理体制もこれまでの外郭団体への委託から、地元鉄輪共栄会が指定管理者となり、地元による運営が実現した。二階部分には観光交流センターが設けられ、専属の担当者が常駐している。当事業は蒸し湯のリニューアル事業の他に、市道美装化整備事業としてメイン通りともいえる「いでゆ坂」と「みゆき坂」を石畳の舗装に付け替えている。これにより鉄輪温泉のイメージはかなり変わったと思われる。また、温泉遺産の復活事業として地元住民によって使われていた洗濯場ならびに熱の湯温泉源泉跡の復元がなされた。最終年度には「鉄輪まちおこしセンター」が整備され二〇一〇(平成二二)年三月の開業を予定している。この施設の名称は公募で『地獄蒸し工房鉄輪』と決定された。

この施設の特徴は地獄蒸し料理の体験施設の設置である。その他に鉄輪の歴史や温泉に関する展示コーナーと地域からの情報発信コーナーも設けられる。また、建物の外には車いすのままでも入浴できる「足湯」と「足蒸し湯」の設置も計画されている。

まち交事業に対して、地域社会は積極的に推進する方向で動いてきたといえよう。地域整備事業決定の報を受けた地域社会は、二〇〇六年(平成一六)一月には自治会・旅館組合・商工会・NPO法人などの代表者による「受入れ協議会」を発足させ、事業に対する地元の要望をまとめていった。敏速な対応が取れたのは、この数年来住民によるネットワークが

築かれ、住民によつて鉄輪の将来像に対するビジョンも醸成されていったことが要因にある。こうした地域社会の対応も評価され「第二回まち交大賞全国大会」において、銀賞に相当する「創意工夫大賞」を受賞した。この賞はモデル性の高い創意工夫のある取り組みをしている地区を表彰するもので、鉄輪温泉の当事業のプログラムは、今後全国の温泉地域再生のモデルとみなされるであろう。

リニューアルされた「むし湯」は旧むし湯に比べて利用者数はほぼ倍増し、開業からちょうど三年を経た二〇〇九年九月に有料入浴者数が一〇万人を突破した。むし湯は別府市内の「共同浴場離れ」が進む中で利用者数を倍増させていることから、共同浴場から観光施設としての役割が大きくなったといえよう。

三 地域資源活用の課題と今後

三―一 別府温泉郷における地域資源活用の課題

別府温泉が飛躍的に発展した昭和初期は「温泉」は観光の代名詞といえる存在であった。その上、別府温泉はその温泉地の最前列に位置していた。つまり、「どこかに行こう」となっ

た場合、先ず一番に候補に挙がったと考えられる。

しかし、今日では「温泉」が持つ場所の力は強いものの、観光の代名詞の座に位置するわけではない。今や観光旅行の目的は、海外旅行、テーマパーク、グルメなどが最前列に位置している。さらに、別府温泉郷は全国の温泉地の中で「有力な温泉地」であることは間違いないが、必ずしも最前列に位置しているとはいえない。別府温泉郷はそのことに気付くのが他所よりも多少遅れた感は否めない。

今日、地域資源に対するまなざしは「観光の不透明さ」が反映されていると考える。今日の観光は『場』のもつ力がなくなりつつあり、情報の事前入手によつて観光地は「確認の場」と化している。つまり、「わくわく、どきどき」という観光動機の根拠が揺らいでいると考える。

現代社会では、旅行者は氾濫する情報の中から「地域資源」を見つけ出さなければならぬのである。現実としては地域資源にまで関心の至る旅行者はまだ少数派といえよう。

多くの観光地は観光客のニーズに合わせざるを得ない状況にある。観光客の多数は旅先でのリスクを極力避けようとしている。つまり、観光は「その通りだ」という確認であり、旅先では新鮮な予習よりも一度学んだ復習を選ぶ。さらに、

快適な空間の保証を求める。快適さに関して別府温泉郷の現状をみた場合、例えば別府を代表する共同温泉の現状を観光客はどのように見つめているのだろうか。検証する必要はあるのではないか。

観光に必要なのは「資源」であり、そのモノに付加価値を付けなければならぬ。「何もしないことが良い」とよく耳にするが、それを観光資源とするならば、周囲の環境を整える必要がある。つまり、見せる工夫（演出）と観光客の足の確保である。どんなに素晴らしい絶景でも其処に行けなければ観光資源にはなり得ない。今別府の地域資源を鑑みると、資源性を磨くことが大きな課題と考えられる。

三二 地域資源活用の今後

地域資源の観光的活用は、社会全般の観光動向よりも旅行者個々の観光に対する「まなざし」に影響されると考える。つまり、地域資源は産業構造、風土、歴史・文化が似通っていれば必然的に創り出されるものも似通うことになるからである。換言すれば日本全国ほとんどが同類の地域資源ともいえるのである。基本的な景観が水田で成り立っている農村部で他との違いを出すとしたら、土地の生活様式に活路を見出

すことになる。今日地域資源活用の先進地といわれている多くの場所は特別なものがあるわけではなく、普遍的な資源の組み合わせ、あるいはイメージ創りによって成功しているといえよう。例えば、一時期話題を呼んだ「地吹雪体験ツアー」は東北地方の農村ならば何処でもみられる地吹雪を上手く演出したものである。その後、東北地方各地で「克雪」という言葉がキーワードとなり、これまで負のモノとして捉えられてきた「雪」を活用するアイデアが次々と生まれたのである。同様のケースは各地で見出すことができる。

同様に温泉資源も全国各地に分布する。湯治はその温泉資源を活用した最高傑作ともいえ、全国各地で累々と伝えられてきたではないか。今後は、例えば新しい入浴法を考案するなどの温泉資源それ自体を活かした活用を考えるのか。それとも、景観といった温泉を巡る周辺環境を活用するのか。注意深く検討しなければならない。

「温泉観光」という我が国独自の観光形態はこの別府温泉郷で創生されたといって過言ではない。さらにその経緯をみると、温泉観光を支えたのはマス・ツーリズムであった。しかし、今日、マス・ツーリズムに対してその負の側面ばかりが強調されている。その側面をしっかりと見据えることは当

然のことであるが、マス・ツーリズムが観光発達史という視点から果たした意義は再度検証されるべきであろう。

別府温泉郷は、このマス・ツーリズムによって地域のアイデンティティならびに温泉観光文化が形成されたといえよう。また、その過程から地域資源も創出されてきたのである。このことを踏まえると、別府温泉郷は地域資源を創出する可能性に満ちた場所であるといえよう。

【参考文献】

- 浦 達雄（二〇〇八）…「別府温泉郷における行政の観光地域づくり」温泉地域研究一〇号、日本温泉地域学会、五三～六二頁。
- 中山昭則（二〇〇六）…「観光・地域づくりと住民参画」別府温泉郷における市民による地域ガイドの事例」萩郷観光学会編『観光からの地域づくり戦略』同文館出版、一五九～一七一頁。
- 中山昭則（二〇〇三）…「大正期における別府温泉の別荘地開発」温泉地域研究創刊号、日本温泉地域学会、一七～二二頁。
- 中山昭則（二〇〇五）…「別府温泉郷における地獄の観光開発と地獄組合」温泉地域研究第五号、日本温泉地域学会、一三～二二頁。

中山昭則（二〇〇七）…「別府鉄輪温泉における地域整備事業の意義」温泉地域研究第九号、日本温泉地域学会、二三～三〇頁。

中山昭則（二〇〇八）…「温泉資源を活かしたまちづくりに関する考察」鉄輪・筋湯温泉を事例として」大分県温泉調査研究会報告第五九号、四七～五七頁。

別府市…『別府市誌』（一九三三）（一九八五）（二〇〇三）各年版

山村順次（一九七五）…「別府市鉄輪療養温泉の実態」。温泉、第四二巻九号、二八～三〇頁。

山村順次（一九八〇）…「温泉観光都市・別府の地域変化」。千葉大学教育学部紀要、三〇巻一部、一二九～一二五頁。

浦達雄（二〇〇五a）…「別府温泉郷における旅館経営の変容」。

温泉地域研究、第四号、一七～二七頁。

浦達雄（二〇〇五b）…「近代における別府温泉郷の形成過程」。

温泉地域研究、第五号、一～二頁。

小堀貴亮・山村順次（二〇〇四）…「別府市鉄輪温泉における湯治場の地域変容」。温泉地域研究、第二号、四九～五四頁。

中山昭則（二〇〇三）…「大正期における別府温泉の別荘地開発」。

温泉地域研究、創刊号、一七～二二頁。

中山昭則（二〇〇五）…「別府温泉郷における地獄の観光開発と地獄組合」。温泉地域研究、第五号、一三～二二頁。

飯沼賢司一（二〇〇六）…「蒸し湯と一遍上人」。遍上人探求会・

別府大学文化財研究所…『蒸し湯つちなんなんー蒸し湯の学術調査報告ー』、一〜五頁。

別府大学地理学研究室（二〇〇六）…「別府鉄輪温泉むし湯の利用

実態からみた資源性」。別府大学地理学研究室研究年報第四号、

一〜八頁。



事務局より

当会では、皆様の研究成果を広くお読みいただき、
会員のお互いの研究を深めたいと考えています。ぜ
ひ原稿をお寄せ下さい。



詳細は108ページの『別府史談』原稿募集について
をご覧ください。